

平成 21 年 6 月 13 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 21 年 第 6 回講話

おはようございます。まず最初に、恒例の質問をしてから入りましょう。

恒例の質問

「昨日一日、朝起きてから寝るまでの間、嘘をつかなかった方、自信をもって手を挙げて下さい」

(・・・沢山手が挙がる)

言いかけた途端に、私の家庭菜園の師匠で北関東フォーラム幹事の神藤さんが、待ち構えたように手を挙げて下さいました。嘘をつかないという方がどんどん増えているので、非常に結構な事だと思います。

「昨日は良い日だったと思う方、手を挙げて下さい」

(・・・沢山手が挙がる)

若干、手の挙がらない方がいらっしゃいましたが、何か心に残る事があるのでしょうか。どうぞ、今日は良い日になりますように。

「昨日一日、有難うと自分で言い、有難うと人さまから言われた方、手を挙げて下さい」

・・・これは、やはりガクンと減りますね。「有難う」とは大概どなたも言うのですが、「有難う」と言われるのはなかなか難しいですね。自分が誰かに何かしてあげて、その結果「有難うございます」と言われたのであればカウントして結構ですが、買い物をして、店員さんに「有難うございました」と言われるのは、カウントできませんね。

この三つの質問を、よくお考え戴くと良いと思っています。

氣になった事

春季合同フォーラムが今月の 20 日 21 日、財団法人 郷学研修所・安岡正篤記念館で 1 泊 2 日で行われますが、おかげさまで参加人数も当初の予定の 70 人を超えております。画期的なことに今回は収支の予測を先に立てて、何と、収支の予測が黒字になりましたの

で、講師の先生方にお車代をお出しできます。ホッとしております。講師の安岡正泰先生は安岡正篤先生のご次男ですから、一番身近に安岡正篤先生を語って下さいます。木内孝先生は、木内信胤先生のご子息です。荒井先生は郷学研修所の所長です。安岡教学に関して、今の日本の中で一番詳しい、学問的レベルの高いのは、荒井所長だと思います。他の会合でこれだけの講師をお呼びするのは、大変な事だと思います。東京フォーラム幹事の方にお骨折り戴いて、準備も大体固まってきましたので、大変良かったと思っています。

総合的直観力 現金輸送車襲撃事件

先ほど何人かの方に「シムックスがテレビに出ていましたね」と、ご心配を戴きました。ご存知の方もおられるかと思いますが、シムックスの現金輸送車が襲われて、現金が強奪されました。その時の状況が現場の防犯カメラに映っておりまして、襲撃の時間はわずか7秒間でした。その時のガードマンは、襲われた瞬間に頭が真っ白になって、現金のケースを2つ持っていかれたのですが、7秒ですから、考える前に咄嗟に取り返しにかかったのです。瞬間的に身体が反応して、犯人の顔面に蹴りを2発入れました。犯人はナイフを振り回したので、上腕部を切られました。

私はこの事件を聞いた瞬間に、何故、取り返しにかかったのかと思いました。会社では、追いかけて相手をつままえようとはしないで、まず我が身を守れと言っています。現金輸送の業界からは、勇敢だったという声が聞こえてきますが、本人は「怪我をさせていただきました。すいません」という事でした。

私も昔、30年くらい前ですが、身体に新聞紙を巻いて、その上からさらしを巻いて、相手が攻撃して来た時に腕一本は切られる覚悟で、相手を倒そうという腹づもりで、相対した事がありますが、現実には切断してしまったら、どうしようもないと思いました。

怖いのは、取り返そうと勇敢に立ち向かったという事が前例になって、又、襲われた時に雄々しく立ち向かって、命を落としてしまっただけは大変です。ですから会社に指示をしたのは、手袋をさせるという事です。ガードマンは普段、防弾・防刃チョッキは付けていますが、手は無防備です。相手が向かってくれば、最初に手で避けますから、そこを守るものがが必要です。今試用しているようです。

こういう話を致したのは、今日は総合的直観力がテーマだからです。総合的直観力は、判断の三原則（本質・大局・歴史）と、知識・見識・胆識、という考え方を全部踏まえた上で出てきます。総合的直観力でこの事件を見ると、資本主義社会の歪みが出たと感じました。なぜならば、「お金を持っていかれても、保険会社から保険金が出るじゃない

か・・・」と思った私の心の動きが、おかしいなと感じました。

話が飛びますが、GMが破産をしました。その時に、<GMが破産をしてくれれば、自分の出している債権の金額が確定できるから、破産した方が良い>と考えている債権者が非常に多かった。GMが破産すれば、AIGが中心でしょうが、保険会社から損失が補填されて返ってくるわけです。

考えてみればGMに対しても、AIGに対しても、アメリカ政府は税金をどんどん投入して助けている。破産した会社にも税金が投入されているし、債権が確定した人にお金を支払う保険会社にも税金が投入されている。何かおかしいですね。これは資本主義社会の歪みだろうと考えました。

私も先ほどの事例で、「勇敢に立ち向かうな！ 自分の身を守れ」と言っても、本当に全部お金を持って行かれて何億もの被害に遭って、全部自腹を切らなければならないとしたら、大変な事になります。保険会社がお金を出してくれると思うから、「身体を守れ」という言い方になる。これは資本主義社会の一つの仕組みではあるけれども、どこかおかしいなと思います。資本主義が行き詰っている事を、今回の現金輸送車襲撃事件で感じました。

これは総合的直観力というものの作用です。色々な知識が混ざり合っていて、なかなか自分が普段気になっている事に対する答えに、ポンと飛び火はしないと思います。自分が日頃思っている事、特に疑問に思っている事について、まるっきり関係ない現象に巡り会って、一つの答えがポン出てくる。これが総合的直観力の大きな作用です。

年代

ちなみに怪我をしたガードマンは全治1ヶ月半くらいの診断になりまして、その後順調に回復しています。その後の現送車の教育も順調に進んでおります。三十代の青年です。人間は、年代によってかなり体力が違うと思いました。これが六十代のガードマンだったら、最初から立ち向かうことは出来ないと思います。

私も六十代ですが、六十代は体力に翳りを感じ、会社を経営しているのであればバトンタッチを模索する年代だと思います。論語で言えば耳順の時代ですから、まあまあ一つ良い時代に入っていると思います。

年代の話が出ましたので、私がお会いして話をさせて戴いて、良いなと思うそれぞれの年代の方を紹介します。

七十代では、現在お付き合いさせて戴いている先生方を思い浮かべますと、ここ湯島聖

堂の理事長の石川忠久先生は 76 歳です。漢詩学会で、漢詩を練習する人達を全国に増やそうという事で、日本国内を東奔西走しておられます。持病はいくつかお持ちのようですが、見た目は非常に元気です。

それから郷学研修所の安岡正泰理事長がおられます。今度の春季合同フォーラムで話をして戴きますが、安岡理事長は講演の依頼で外に出ると、帰って来て 2 日間は休みを取らないと回復しないとっておられました。同じく春季合同フォーラムでお話戴く荒井桂所長も七十代です。

これらの先生方は良好な例で、皆、第二の人生です。石川先生は二松学舎の理事長を長く務められて、その後ここ財団法人斯文会の理事長に変わられました。安岡理事長も、日通の健康保険組合の理事長をずっとやっておられて、引退した後、安岡正篤記念館の理事長になられました。荒井所長は埼玉県の教育長を長くやっておられて、引退して郷学研修所の所長になられました。皆、七十代半ばの方々ですが、やりたいと思う事を七十代でやっておられる方は体力的に順調に回っておられると感じます。

対して、私の友人で或る新聞社の社長ですが、七十代になって社長になりました。今、必死になって仕事をしていますが、これは身体によくないですね。この間も大病をして、病院に行ったりハビリをしながら社長業をやっているような感じです。

七十代で、もう一人良いなと思う方がいます。御徒町で靴磨きをしているおじさんです。話を聞いたら 79 歳でした。60 年間靴磨きをしているそうです。「年金がないので、靴磨きが年金なんです。60 年間、これで子供を育てたのです」と言って、非常に楽しそうに靴磨きをしていました。88 歳までは続けると言っていました。

八十代の方で、良いなと思う方を紹介します。先日、聖堂の改修工事完成記念式典に出席しまして、同じテーブルに三重野康さんという方が座っておられました。元日銀総裁で、横綱審議委員も務めた方です。年齢をお聞きすると、85 歳だそうです。友達がなくなる事が残念だと言っておられました。

又、吉田鷹村という先生は 88 歳で、今度、日本橋の高島屋で書道の展示会をされます。皆さん、二つ目の人生を上手に過ごしておられる。

最後に九十代です。先日仕事でお会いした広尾の不動産会社の社長さんですが、現役の社長で 91 歳だそうです。ほとんど目が見えないそうですが、91 歳で社長ですから、凄いと思いました。

又、私の詩吟の先生である坂本坦道先生は、96 歳で詩吟を教えておられます。ですから九十代でも、何か自分なりにこれと思うものをやっておられて、周りで支える人がきちんといれば、元気で活躍できると感じました。

ですから年代によって、自分の人生に対する対応の仕方が違うなと感じました。手本となるような先輩がたくさんおられます。六十代の方は、70歳になってもやる事がたくさんあるし、七十代の方は、80になってもやる事がたくさんあると思います。

今日の論語

先ほど読みました論語の素読の内容について、解説を申します。

本日は八佾第三 1～8章です。

こうし きし い はちいつ にわ ま
孔子 季氏を謂う。八佾 庭に舞わす。
これ しの いず しの
是をも忍ぶべくんば、孰れをか忍ぶべからざらんと。

孔子が季子について批評しました。

八佾の舞とは、8(列)×8(人)=64人の舞妓が踊りを踊る。天子しか見ることのできない素晴らしい踊りです。ちなみに、天子は8列ですから8×8で64、諸侯は6列で48名、大夫は4列で32名です。ですから季氏は本来なら32名の舞をすべきところです。

季氏は陪臣の身でありながら、自分の庭でそのような八佾の舞をやらせるというのは、大変増長している。こういう礼儀知らずな事を平気でする人間は、主君も殺して自分がその地位に取って代わろうというような魂胆が透けて見えるではないか。こういう場合、我慢する事は良いことか悪いことかねえ・・・と孔子が増長する季氏に皮肉を言っている文章です。

ここで思い出すのは自民党の鳩山邦夫さんです。日本郵政の西川社長と揉めて辞任しました。本人からすると、「社長を首だといえる権限をもっているのに、何故行使させないのか。正義を実行しようとしているのに、周りが口を挟んでやらせないというのは何だ！これを我慢しろというのか・・・。これを我慢したら、他の事を皆、我慢しなければならぬ。そうすると自分の考えている男ではなくなる・・・」というように考えれば良いでしょう。

論語の科白は、自分自身に置き換えて考えてみるとよろしい。

さんか もの よう もっ てっ しいわ たす こ へきこう てんしほくほく
三家の者、雍を以て徹す。子曰く、相くるは維れ辟公、天子穆穆たりと。
なん さんか どう と
奚ぞ三家の堂に取らんと。

三家とは三桓（孟孫・叔孫・季孫）と言って、下剋上をやっている人達です。

この文章は、無知蒙昧は怖いという事を言っています。

雍というのは詩です。天子が先祖の廟を祭り、供物を下げる時に歌うものです。その祭祀をする時には、天子が自ら祭りを司るのが普通のスタイルです。諸侯は天子を助けて、祭祀を実行するわけです。その時の天子は深遠で恭しい様子です。そういう内容を三家の人間は知らないで、祭祀をした時に供物を捧げて下げていた。

雍という歌を歌って、捧げものを下げようとしているけれども、本来、雍の中には、「相くるは維れ辟公、天子穆穆たりと」とあるにもかかわらず、何も知らないで、無知蒙昧が儀式そのもののルールを踏みにじってやっている。これは、やはりいけない。学んで、それなりのルールを覚えてからやるべきだろう、と孔子が三家の者を批判しています。

今風に言えば、三家の者とは分家の成金連中だと思えば良いでしょう。本来本家でやらねばならない儀式・ルールがあるにもかかわらず、だんだん分家から分かれてくると、本家でやるべき事を知らないわけです。その分家がお金持ちになって増長して、本家がだんだん衰えてくる。そうすると本家へ乗り込んでいって、大きな儀式をしようとする時に、本家のやり方を知らないまま、成金のやり方でやってしまった。そうすると周りで見ている親戚が「金持ちになったからといって、本来のすべきことを知らないのはけしからん」となる。そう捉えれば良いでしょう。

子曰く、人にして仁ならずんば、礼を如何にせん。
人にして仁ならずんば、楽を如何にせん。

人として人らしくない者が礼を習ってどうするつもりだ。人らしくない人間が、楽を歌って何になるのだ。

腹の中に一物ある人間が、うわべだけ装ってもどうにもならない。肝心なのは、うわべを装うのではなく、中身を鍛えなさいと受け止めればよろしい。

周りを見ると、上っ面だけ飾って中身のない人間がたくさんいますね。皆さんも心の中に何人か思い浮かぶかもしれません、口に出さない方が良いと思います。

先ほども申しました鳩山さんで考えれば、果たして西川さんは仁の人か？ と考えてみ

ると、一つの答えが出ます。鳩山邦夫さんは、人として人らしい人徳を積んでいるから、あのような話になるのか、それともまだ人徳を積むのが足りないから、あのような話になるのか・・・そう思っただけ見れば良いでしょう。

翻って、自分自身に人徳ありや、なしや？ というところに落ち着くと思います。

りんぼう れい もと と しいわ だい と
林放 礼の本を問う。子曰く、大なるかな問うこと。
れい そ おご むし けん そう そ おさ むし いた
礼は其の奢らんよりは寧ろ儉なれ。喪は其の易まんよりは寧ろ戚めと。(八佾第三)

林放という人が孔子に「礼の根本は何でしょうか」と聞きました。

孔子が答えるのに、「大きな問題を出してくれたけれども、あなたの質問は非常に良い。礼儀・礼式は贅沢にしない。贅沢よりは儉約が良い。自分自身を豪華に飾り立てないで、慎ましやかが良い。葬儀は華美で手際よく整えるよりは、むしろ哀悼の情が伝わってくるようなものが良い。」

例えば、会社の社長さんの奥さんが亡くなった場合、社長が亡くなった時よりもむしろ参列者が多い。商売の付き合いで弔問に来る人が多いので、派手なお葬式になるものです。そういう時にも、哀悼の情が伝わってくるような葬儀が良いと孔子が言っていますので、考えておかれると良いと思います。

しいわ いてき きみあ しょか な ごと
子曰く、夷狄の君有るは、諸夏の亡きが如くならざるなり。

夷狄とは、野蛮な国です。中国から見れば、東夷・西戎・北狄・南蛮という四つの野蛮人という意味です。

野蛮人の国でも、主君がいる場合はすばらしい。諸夏のように君子のいない国は、野蛮な国よりももっとレベルが低い。

国で見れば、日本の国は総理大臣が次から次にコロコロと変わる。これは諸夏と言ってもよいでしょう。総理大臣がいるけれどもいないような感じがする。それよりは、三度目の核実験をするというような国は、中心人物がいるわけですから・・・さて、どちらが良いか考えます。なかなか難しいですね。

会社で考えれば、横車を押す会社で、人の足ばかり引っ張っているようなどうにもならない会社でも、社長がいてしっかりとやっていたら、その会社はまとまる。ある程度大き

くなっている、中心人物がきちんとしていなければ、どうにもならないだろう、とお考え下さい。

少し話がそれますがけれども、中斎塾フォーラムの前身は悟道会という勉強会です。3人でスタートをして、その頃は若い経営者が集って勉強会をしました。毎回テーマを決めて語り合うのですが、今回のテーマが「経営改善計画」という内容で予定されています。経営改善計画と聞いた瞬間に思ったのは、シムックスの役員の若返りです。年齢のいった役員さんは、株主総会で再任しない方を決めます。そして役員を減らします。若手を中心とした執行役員会を作っていきます。老子の中に、「仕事が一段落したら、さっさと引退せよ」とあります。一区切りついたのに、創業者又は二代目が「俺がいなきゃ何ともならん。俺ががんばらなきゃ・・・」と言いながらやっているのは、下の芽を潰していることになる。したがって若返りをしましょうということです。

中身が整ってきたら、次はお客様を選別しなければなりません。第二は良いお客様を増やし、悪いお客様とは縁を切るという計画です。良いお客様とは、成長を続けていて、しっかりとした経営哲学を持ち、支払いがきちんとしている会社です。そういうお客様にどんどん切り替えて、悪いお客様とは縁を切る。昔からの付き合いがあっても、悪いお客様だったら縁を切る。悪いお客様とは、手形取引を当たり前に行っている会社、支払い条件を早くしたり遅くしたりする会社、支払日に払ってくれない会社です。ところが、こう明確に定義をして進めても、なかなか進まないのです。昔、いくらお世話になっても、今きちんと支払いをしてくれなければ、悪いお客様に定義されますから、お付き合いはしないと決めています。

最後に資金繰りです。今、銀行はお金を貸さないのが普通です。したがって、銀行からお金を借りないで、資金計画を立てねばなりません。これは長期・中期・短期に分けて考える必要があります。今は政府からお金を調達するのです。政府は今、無茶苦茶にお金をばら撒いていますが、じきにばら撒きは終るはずですよ。おまけに今度は消費税を上げましょう。したがって景気は、今年は悪いまま、来年も悪いまま、再来年は断崖絶壁でガタンと落ちる。ですから経営者は今のうちに、再来年に一気に坂を転げ落ちていく経営環境にどう対応するかを考えておく必要があるだろうと思います。

先ほど、創業者はさっさと退いた方が良くと言いました。今、私は赤城に書齋がありまして、そこで切り株を掘り起こしたり、つつじを植え替えたり、樹木を移し変えたりしています。つつじを植え替えるのは、根っこが丸く丸まっていますから意外と簡単でした。

リンゴの木は、根っこがあちこちに遠くまで伸びているので、大変です。

先日の湯島聖堂の改修工事完成記念式典で、東京農工大学の名誉教授の亀山先生が、湯島聖堂の樹木の伐採について指導をされたという事で、講演をされました。話を聞くと、湯島聖堂の樹木を伐採するのに一番大変だったのは、自然環境保護団体と近所の方だと言っておられました。樹木を切り始めると、あちこちから人が集って来て、「これだけ立派な木を切ってはいけない」と言うのだそうです。その人達をなだめて説明して、樹木をきちんと伐採するのに、3年くらいかかったそうです。

湯島聖堂にはうっそうと茂って大木になっていた楠があったのですが、その楠木を切るのが大きな決断だったそうです。その先生曰く、

「枝と同じように、根っこもずっと遠くまで這っているのです。地上と地下で、周りにももの凄く迷惑をかけている。楠を切ったら、昭和10年4月14日に斯文会総裁の伏見宮殿下が御手植えになられた梅が、ひねこびていたものが、太陽が当たるようになったので、ちゃんと伸びて実がついた。巨大な木の周りがある若木から草から、皆、迷惑を被って枯れて行くものばかりだった。楠がなくなったので、これで新しい若い芽がどんどん育って行って良いことだ。こういう話を環境保護団体にしたら、納得してもらえた。」

これはそのまま会社も同じです。シムックスという会社を私は創りましたが、創業者とは、周りから見ると結構大きな力を持つようでございます。右だ、左だと言うと、それに合わせて動いてしまう。だからさっさと辞めなければいけないのだと思います。自分で気がつかないうちに、若い芽を摘んでいるのだということを、楠を伐採した話を聞いてつくづく感じました。

き し たいざん やままつり し ぜんゆう い いわ なんじすく あた
季氏 泰山に 旅 せんとす。子 冉有に謂いて曰く、女 救うこと能わざるかと。
こた いわ あた しいわ ああ すなわ たいざん りんぼう し おも
対えて曰く、能わずと。子曰く、嗚呼、曾 ち泰山は林放に如かずと謂えるかと。

これは、家老職にいる人間に対して、「お前はちゃんと主君を諫めて守っていかなければいけない。自分の身の保全だけを考えてはいけません」と言っています。

季氏が天下一の名山で臨時の大きなお祭りをする。こういう事は天子がすべき内容のもので、陪臣がするものではない。

孔子が冉有に対して、「お前は季氏の家老なのだから、なぜ主君に言って止めさせなかったのか」と聞きました。

冉有が答えて、「主君に逆らう事はできません」と答えた。

そこで孔子が、礼の根本を質問した林放と比べてみて、この泰山の山の神は、このような非礼の祭祀を認めるわけがない。お前は何をしているのだ、もう少ししっかりしなさいと冉有に言ったわけです。

今の時代で置き換えると、麻生総理に対して諫言すべき人間が、諫言すべき時に諫言しない。それは駄目ではないか、と捉えればよろしい。鳩山さんの諫言は、少し意味が違っていましたが、諫言すべき人間が諫言しなければ、どんどん悪くなっていくと思えば良いでしょう。

し いわ くん し あらそ ところ な かなら しゃ
子曰く、君子は争う所無し。必ずや射か。
ゆうじょう のぼ くだ の そ あらそ くん し
揖讓して升起、下りて飲ましむ。其の争いや君子なり。

君子は争わない。しかし例外として弓道は別である。弓の争いをして、勝った者が負けた者にお酒を飲ませる。こういう時に、勝者も敗者もお互いに譲り合いをしながら歓談をする。そういう状況を考えてみればよろしい。ある程度の域にまで達した人間同士は、面と向かって争わないとお考え下さい。

今朝も、テレビで政治家の討論会を放送していました。見ていますと、司会者が話をふる前から勝手に喋りだす。みっともないと思います。言葉での争いをしているわけだから、この人達は君子とは言えないと思います。

子供たちにもものを教えるような状況でも、大人を君子として捉えると、情けない君子が多すぎると感じます。ですから自分自身は、なるべく控えめにしなければいけないと思われされます。

論語は何かというと、自分自身に置き換えて考えて、これは反省しなければならないというものばかりです。反省ばかりしていると疲れますので、自分の波長に合うものを見つけければよろしいと思います。

し か と いわ こうしやう せん びもく はん そ もつ あや な なん い
子夏問いて曰く、巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢を為すとは、何の謂いぞ
し いわ かいじ そ あと いわ れい あと し いわ われ おこ もの
やと。子曰く、絵事は素を後にすと。曰く、礼は後かと。子曰く、予を起す者なり。
しょう はじ とも し い
商や、始めて与に詩を言うべきのみと。

巧笑 倩たり、美目 盼たり、素 以て絢を為す・・・これは『詩経』の中の「国風」という詩です。今風に解釈して詩にしてみました。北関東フォーラムでもご紹介しましたので、申します。

心がとろけるその笑顔
その口元には引き寄せられる
鮮やかでくっきりしたその目元
何もしないのにこれだけ素晴らしい
どうしてこの上お化粧をするのだろうか

子夏が孔子に聞きました。

「素材が良いのに、どうして厚化粧をするのですか？」

孔子が答えるのに、

「絵というものは、地塗りをしてから彩色するものだよ」

子夏が更に尋ねました。

「なるほど、では、礼儀作法は修身という心の地塗りをした後に行うものだ」と解釈してよろしいですか」

孔子が答えました。

「私の心の中を良くぞ見抜いた。初めて、私と一緒に詩を解釈し、楽しむことが出来る。お前はたいしたものだ」

絵を見たり、書を味わったりする時に、表面のものだけを見ないで、中身の心を見るという部分でございます。

心に残る言葉

今日紹介するのは、野島透さんという方の書かれた『山田方谷に学ぶ 改革成功の鍵』という本です。野島さんは山田方谷の子孫ですので、山田方谷に関して色々書いておられます。

平成 21 年度、日本の公債依存度は 37.6%であり、松山藩の公債依存度は現在の日本の約 2 倍である。

『山田方谷に学ぶ 改革成功の鍵』野島透著 明德出版社

山田方谷は備中松山藩（今の岡山県高梁市）の総理大臣兼大蔵大臣として、財政改革にあたりました。備中松山藩は当時5万石ですが、今のお金に換算すると600億くらいの借金をして、それを8年間で返済をし、尚且つ600億の利益をあげた。合計1200億の利益をあげて、疲弊しきっていた備中松山藩を建て直した。その経緯を色々と紹介しています。野島さんは税務署の方だけあって、当時、備中松山藩の租税がいくらだったか等々調べて、その結果として600億という数字を出しました。

私は600億ではなく、100億と計算しておりますので、ここらへんは話が平行線を辿っていると思いながら、今、お付き合いをさせて戴いております。山田方谷に、もう一度私は焦点を当てたいと思っています。『陽明学のすすめ』は、方谷に関して書こうと思っています。

総合的直観力2 時事問題 鳩山氏辞任

最後に総合的直観力に関して、もう少し触りを申します。

今、世間を賑わしている鳩山さんの行動を考える時に、総合的直観力は色々な知識が必要ですから、今回の辞任の件だけを考えるのではなく、色々見なければいけません。

鳩山さんが法務大臣の時に何をし、何を喋ったのか・・・死神と言われた経緯がありました。13人の死刑執行にサインをしましたね。

本人はどういう自意識を持っているか・・・自分の父親は外務大臣、祖父は自民党初代総裁で総理大臣でした。そういう名門意識がかなりあるでしょうし、兄に対するライバル意識もあるでしょう。そういう自意識が、かなり今の行動を左右していると思います。

麻生さんに対する思いはどういうものがあるか・・・太郎会という後援会の会長ですね。

政局に関してどうか・・・そろそろ総裁選に打って出る為に、自分の派閥を立ち上げなければならぬ。それには自民党から飛び出した方が良いか、党内で派閥を作るかということも考えねばならぬ。

鳩山さんは辞任に関して、「私は辞任しない。罷免されるならよい」と言っていました。その前言を翻したのは、「仲間と相談して、潔く辞任した方が良いと言われたので辞めた」と言っていました。自分の意見を通さないで、仲間の意見で変えた。いくら口で言っても、行動する時に人の意見によって左右されるという事を公表したようなものだと感じました。

総合的直観力で鳩山さんの行動を眺めた時に、日本の政治は落ちる所まで落ちている、アメリカは落ちたけれども、日本の落ち方も酷いなと感じました。木内信胤先生であれば、

「今の政治は酷くなったねえ・・・」というくらいで片づけられるだろうと思います。総合的直観力は、そういう結論を言った後で、その結論に至る経緯を細かく説明する事になります。

本日の講話は以上でございます。有難うございました。